

夫の気遣いで防げる



認知症のようでも認知症でない「認知症もどき」がある。その原因が、思いがけないものだったりする。

62歳の主婦、S子さん。「自分は認知症に違いない」と訴える。ひとに頼まれたことを忘れたことがある。仕事の段取りも悪くなった、と深刻である。だが、もの忘れのテストをしても、記憶力はそんなに悪くない。年齢を考えれば、正常といってもよい。頭部MRI（磁気共鳴画像装置）でも異常はみられない。もちろん、認知症ではない。よく話を聞くと、Sさんは、最近ずっと気分が沈みがちで、やる気がでない。夜中に目覚

仮性認知症

めて、眠れなくなる。食欲もない。軽いつつ状態のようだ。

ひとは、長い間続くストレスに弱い。そのストレスがもどつつ病になったりする。すると、注意力、集中力や判断力が低下してしまつ。頭の電池切れ状態で、ひとの話をいい加減に聞いているようになる。大事かどうかの判断も適当になってくる。一見、認知症のようになる。この状態を「仮性認知症」と呼ぶひともいる。認知症の薬の効果はなく、まずはうつ病の治療を始めなければならぬ。

ところで、Sさんがうつ状態になったワケというのも、ひとごとではない。会社勤めをしていた

頭の電池切れ「もどき」に

5歳上の夫が定年となり、ほとんど家に居るようになった。夫は、毎日することがなく、テレビの前の粗大ごみ状態だ。毎日のように、昔の自慢話か、愚痴を聞かされる。気晴らしに出かけようとする、

「どこへ出かける?」「誰と行く?」とつるさい。ストレスは溜まるいっぽうだ。しだいに体調が悪くなり、もの忘れまでひどくなったというわけだ。

似たような患者さんは少なくな。この状態は、ちょっとした夫の気遣いで防げるのだ。が、ダメなワッシーは、仕事を続けるしかない。

(石黒修三 いし黒修三クリニック
・脳神経外科専門医、金沢市在住)